

弘法大師空海こうぼうだいしゅうかい

生誕1250年

令和6年（2024年）は、空海が生誕して1250年という記念の年です。空海は高野山に初めて寺院を建てた人物であり、池の堤防を築く工事を指導したり、学校を開設する事業などにも携わりました。また、「弘法筆を選ばず」ということわざがあるように、書の名人としても有名です。後に、その優れた功績がたたえられ、弘法大師と呼ばれるようになりました。有田川町を東西に流れる有田川は、高野山に源流があり、かつての有田川町は高野山麓の一地域として高野山と非常に深い関わりを持ち続けてきました。

空海は、宝亀5年（774年）に讃岐国（現在の香川県）に生まれ、都の大学で役人になるために勉強をしていましたが、困っている人々を救いたいという思



弘法大師像（二川・安楽寺蔵）

いから、僧として生きることを決意します。延暦23年（804年）には、遣唐使の一員として中国に渡って真言密教を学びました。それまで断片的にしか知られていなかった密教が、空海によって初めてその全貌が日本に伝えられました。弘仁7年（816年）には、高野山に金剛峯寺を建て始め、京都の東寺も与えられて真言宗を広めました。

空海は、今も人々のために瞑想し続けているという信仰が生まれ、天皇や上皇、貴族、武士、一般庶民に至るまで多くの人々が高野山に参詣に訪れました。高野参詣には、徒歩で歩き、仏の名やお経を唱えて参詣することで、罪による穢れを消滅させるという信仰があり、参詣道が重要な役割を持っていました。高野山へ至る参詣道は「高野七口」とも呼ばれ、主に7つのルートがありました。その内、有田川沿いの参詣道は

「有田・龍神道」とも呼ばれ、高野山へと行きかう多くの人々が利用し、また交通や物流上の重要な街道として使用されてきました。



高野参詣道（伏羊地区）